

彼の死も平和の礎えとして蘇生させたい

塩見 龍男

軍隊というところは、なぜ、あんなに厳しい所だったのか？それは、頭の先から足の先まで滅私（死）奉公の化身にするためだったのか？ともかく、すごかった。

一生懸命やっけていても、たるんでいると、平手打ちはもちろん、精神注入棒（細身のバットのような棒）でお尻を思い切りたたかれましたものだ。だから、下士官と兵との共同浴場に入っている時など他の分隊の下士官から、「そのたたかれようは、どこの分隊か？」などと、よく聞かれた。それというのは、お尻の辺に横向き紫色のミミズばれが何本も入っているからであった。つい先日、訓練の厳しさに一人の戦友が首をつったのである。それは、敵戦闘機の昼間における飛来を受け、空襲警報が鳴り、兵舎近くに掘られていた幾つもの防空壕（ごう）に分散して避難した時

のことである。昭和二十年七月末だったと思う。で、私たちは、防空壕に飛び込んだ途端、急降下してきた敵戦闘機から発射される銃弾が、壕入口の防弾用ついたて（土嚢を積み上げたような壁）にピチピチピチと当たる音がし、それと同時に敵機急上昇のバリバリというはげしい音も耳に入った。さて、空襲解除になって壕から私たちは兵舎へ戻る。兵舎へは、その手前にあるかわや（トイレ）の建物を抜けるのが近道だった。かわやの真ん中には通路があり、その両側に木造のかわやが幾つも並んでいるのだが、かわやの戸は腰の辺までしかないのに壺は壕のように深く、下でつながっていた。で、その通路を足早に行くと一つのかわやの上の梁（はり）から、足に巻くゲートル（巻き脚絆）がピンと張った状態で下方へ垂れ下がっているのを発見した。

足を止め、「あれは何だろう？」と言っていると、あとから来た戦友が、つかつかと近

寄りかわやの中をのぞいて飛び上がった。「あっ、首、首をつっている！」のぞいた彼は、びっくり仰天跳ね飛ぶような姿で兵舎の方へ駆けて行った。

首をつった戦友は、ある豪農生まれのお坊っちゃんだった。原因は訓練がつら過ぎたのである。もちろん辛抱も大切だ。それは、お国や郷土や家族のために訓練しているのだから。(当時はだれしもそう思っていた。)でも、あまりにもむちやをされる部分もあった。二、三の例を挙げると、カッターのこぎ比べに負けたと班長から海水をぶっかけられ食事のお預けを食ったり、急降下といって、物入れ棚の上部から逆さ向きになり、舟をこぐ動作をさせられたり、また、食事後に近くの山を寝袋をかついでの一週を命じられたり、それはいろいろとあったのです。ところで、彼の死は上部からのお達しで「戦病死」ということになり、ご両親が汽車で遺骨をもらい受けに来られた。

私たち分隊全員は兵舎前に整列し、それを見送った。ご両親の後ろから白布の遺骨箱を首から下げて神妙な顔でお供して、行ったのは、何と彼を死に追いやったあの班長だった。

さて私は、この戦友も含め、あまりにも多くの尊い人命の上に築かれたこの平和を、何より大事にと戦後五十年を生きて来た一人だ。これからもこのことに変わりはないのである。